

YAMATOZA

大和座
通信
大通

日々新面目

其の十九

安東伸元

「古典に親しむという事は、郷愁をもって故事を愛で懐かしみ、その高尚かつ高級な情趣を学習的に摂取するということだけではありません。地球上のどの国にあつても古典伝統的文化には長年月に亘り歴史的に積み重ねられて出来た芸術観念や文化思想という民族の財産が内蔵されています。そしてこれが人間の心に作用して、その国・その民族の個別な思想や品性を育む源泉になります。ところで私たちは、近代国家への出発点の明治維新と太平洋戦争敗北による屈辱的占領政策という二度の外圧によって、この深淵芳醇な文化の泉が湧き出す古壺に蓋をして、国家と民族の文化基盤を西欧文化思想に置き換えるという野蛮行政を是として二〇世紀をひた走って来ました。その結果もたらされたものが、繁栄を得ているはずであるのに消えない、混

沌と変容による今日の不安感であつて、これが国家の存亡に関わる問題であると、近頃しきりに論じられます。……これは、ある文化センターの狂言講座を宣伝説明するために作文したものである。もともと本文は右のような内容を短く要約したものを提示するのであるが、先ずこのような切り口は担当者に人気がなく、たいてい慇懃無礼に修正を求められる。好ましいとされる文案は、古典芸能にあつては概ね次の二種類である。まず講師の身分・家柄・肩書きなどに関する麗々しい記述が大部分を占め、講師の思想信条などは一向に考慮されない。その上で、「あの有名な先生と、選ばれた貴方が楽しいお稽古のひとときを……」という切り口が一つ。今一つは、老齢世代にとつて最大の関心事である健康の保持増進に有効であると説くものである。さて私は、この両方の切り口について妙な軽さが感じられて気になるのである。人間の生存に重要な意味を持つ文化を扱うのに、解りやすさと気安さをと考える余りの知性を働かさぬ軽便さが気になるのである。例えば青少年を狂言教室に誘う案内に「君もあのスターのやになろう！」というような言葉が臆面もなく印字されるのを見て、私は恥ずかしさを憶えるのである。

テレビで放映される通信販売番組は、連日二十四時間にわたり実にさまざま商品

を宣伝販売している。化粧品や洋品雑貨・貴金属は西欧超一流のブランドを力説し、それを特別に貴方様へだけ格安に提供する。食と女性たちの美的変身願望を刺激する。食欲を刺激する数々の食料品は、数量に境界のある天然物だと希少価値を強調し、今回限り特別に貴方へなどと興味を煽る。歯の浮くような美辞麗句を連ね止め処なくしゃべり続けるアナウンスを聞いてみると、これは何者がが仕掛ける何かの戦略かなと思つたりさせられる。これを利用する人達は、国際的超一流品だと昼夜を分かたず喧伝されるこれらの品物を時々手に入れて、束の間上流の気分を味わつてそこはかとない安心感を得ているのであろうか。そういう大衆が浮遊して存在する事を見越した上で、この番組は成り立っているのである。かと思つた思つのである。イタリアの皮職人の伝統と技術を誉めそやす饒舌を聞いてみると、これはまさしく平成IT時代の啖呵売り（バナナの叩き売り）だなと思つて、私は情けなくなる。私たちの日本は、叩き売り様相の文化を許す軽佻浮薄な国に成り果てたと、私は自戒の念を込めて敢えて言おつと思つ。しかしこの様な事を言つと、実力者を自認する先生方からは大叱声を浴びるのであつ。この文化体制を結構とする文化人の方々は冷笑と侮蔑を蒙るであらう。この文化様相を世界に冠たるものと喜ぶ人達からは

猛反撥を受けるであろう。先般の上方歌舞伎界揚げの「坂田藤十郎襲名興行」は、海外からの研究者や取材報道人なども集めて、見事に内外の人気を盛り上げた。中でも大名代がずらりと居並ぶ口上の場面が圧巻で、これを見た或る有名人はテレビのインタビューで「日本人に生まれてよかった」という感想を漏らした。また別の研究者では「この時代に生まれ合わせて幸せ」という意見もあった。私はこの言葉の何れにも、何と大げさな違和感をおぼえるのである。古典伝統芸能の麗々しい仕掛けに、郷愁を伴った感動をする心は、恐らく多数の国民に共通するものだろうと思う。多分この人たちは、能楽にあつては各流家元の舞台を型通り賞賛し、歌舞伎は梨園の名家当主や御曹司を鼻屑にし、そのほか邦楽一般では人間国宝の諸芸を最高級趣味として愛るのである。つまり古典を格によって整理分類し、あたかも花鳥風月の傑作を鑑賞するが如く、その個々の様式を愛で楽しむに留める。これが我が国における古典芸能との良識的な接し方とされ、ジャーナリズムもメディアもこの枠組みを逸脱しない報道に徹する。そして、このような鑑賞方法を知り、自身もこれを踏襲する事がハイスカイエティ域に座を得るための条件と認知されている節もある。全ての古典伝統芸能にあつて、世襲による伝承と継続を

正当とする事に不審を表明する人は年々増えていくようであるが、この慣習は権力者層から圧倒的な支持を与えられ、また国家指導者による教育指導を受けた大衆の賛同をも得て健在である。この国家的な認知が権力を生み、家長や家元が芸道のためという美名の元に弟子の生殺与奪の権利を握る事をも容認してしまう。先ず定められた家集団があり、その芸能全体を維持するために個々の家に滅私奉公する弟子という存在が必要になる。この構図は領主と農奴という関係を連想させ、何とも人間に優しくない悲しい状況であると言わざるをえない。個人の生き方が尊重される生活志向が主流を占める現代社会にあつて、なぜこのような因習が温存されねばならないのかという疑問が如何にしても解けないで残る。歴史の風雪に耐えて生き残った古典には人間の本質に作用する力がある。その民族が毅然として依つて立つところの精神基盤を育む力がある。ただしそれが為には真正正銘自前の古典でなくてはならない。真の古典とは、そうしたものである。我が国歴代の施政者は、徳川の武家支配の系譜を踏襲して、国民大衆の批判精神を芽生えさせ自立を促す影響力を持つかも知れない演劇を危険視する政治思想を持っているようである。そこで、きままな類推を一つ。人間の精神的自立をもたらせるような真の古典は余計

であつて、ただ無害に花鳥風月を楽しむに足るもので充分。そして、愉しむためには鑑賞物は重々しくて立派な方がよい。そこで由緒・故事来歴が殊更重要そうに持ち出され、その上で、一子相伝・男子世襲などの制度が権威付けに温存されるわけである。また占領時に於いて英米が最も恐れたものは日本人の精神思想とその復活であつた。そのために真実の古典を有名無実な骨なしのものにする必要があつた。そこで彼らが撰んだ統治政策は、甘美・軽快・明解な娯楽文化のシャワーを日本人に浴びせ続ける事であつた。これによって民族の古典文化は見事に骨を抜かれ、毒にも薬にもならぬ絵に描いた餅に成り果て、それに変わつて急激に移入した西欧文化は模倣の域を越えず、これでは不動の背骨を持つ事もかなわず、日本及び日本人が斯くも変容した浮遊の民に成り果てたというわけである。この原稿を書いている最中、朝日新聞の見出しに目を奪われた。指導要綱「言葉の力」重視。文科省の次期原案「ゆとり」を転換という文言である。説明に「言葉は、確かな学力を形成するための基盤。他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための手段で、知的活動や感性・情緒の基盤となる」と明記されている。本来の古典文化を粉飾せず正しく導入していれば、民族文化の根幹である国語／言葉について、政府が

このような通達を出さねばならぬような事態には決して立ち至らなかつたはずである。年頭より偽計・偽装・偽造などという言葉が巷間を賑わしている。いずれも正道をわきまえず、他人をいつわった結果の大事が噴出して世間の糾弾を浴びているものである。

文部科学省高官が述べる右の説明を精読すると、政府は教育の現場にそれを求める以前に、大人たちにこそ言葉の力を教えなくてはならぬと思う。そのようになつてしまつた要因は、歴代政府の虚偽行政である。虚偽とは古典伝統的なもの一切について、行政に都合の良いように管理統制し手を加えておきながら、自国の古典に厳肅なる姿勢を持ち、なお高邁なる英知を持つてそれを人間形成に生かす高度な文化国家であるが如き体裁だけを繕ってきたという事である。この積年の欺瞞が国語の喪失を産み、言葉の力の意味を知らぬ人間を大量に出現させているのである。私たちは本公演の最初から言葉にこだわると言ってきた。古典芸能文化が人格を鍛え、生きる力を養つことを信じるとも言ってきた。近年の古典伝統芸能を取り巻く妙なお祭り騒ぎを横に見ながら、底知れぬ虚しさを抱えて生きてきた。かつて「ゆとり教育」と言い、十年経つた今「言葉の力」と言う政府に新たなやりきれなさを憶えている。昨年末の公演で、私たちは何か一つ弾けたよう

な感触を得て感激を憶えました。その感激の源は、待望の百人を越すお客さんのご来場でした。この感触と勢いを今年の公演に持ち越したいと切に念じます。

二月十日



安東 伸元（あんどう のぶもと）
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会。狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八〇年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二〇〇一年、重要無形文化財（能楽）保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「武悪」

もろきゆう

この稿では狂言「武悪」という題名について考えてみたい。「武悪」と聞いてまず思い浮かぶのは、武悪面である。武悪面は能面のべしみ・大べしみの類型の面で、狂言では主に鬼の面として使用している。私たち大和座で、武悪面をよく使う狂言は「清水」・「おばが酒」・「神鳴」などである。狂言「武悪」の題名から内容を想像すると、武悪面にまつわる話か武悪面の由来など、面が中心となる展開を想像するだろう。ところがそうではない。登場人物の名前を取つて題名としているのだ。普通ならば狂言の登場人物は主人・太郎冠者としてもう一人の使用人は次郎冠者とするのが多い。しかし、「武悪」では次郎冠者にあたる人物を「ブアク」（以下、人名は片仮名で表記する）と呼んでいるのだ。主人はこのブアクの奉公の悪さに怒り、太郎冠者に太刀を渡し、ブアクを成敗しよう命じる。太郎冠者がまんまとブアクを成敗するかどうかは狂言を御覧いただきたい。上演時間、一時間を越える大作である。

さて、「武悪」という題名はこの使用人の名前がブアクというところからとつたものと考えられる。それならばなぜ次郎冠者

ではなくてブアクなのだろうか。安直な方法だが、狂言の作品の内容について何かを調べようと思えば、注釈のついた本を探すのが最も手っ取り早い。私はまず日本古典文学大系『狂言集』を見てみたが、この本の頭注は語句の意味のみだった。次に新日本古典文学大系『狂言記』を見てみると脚注には武悪の考察があった。

「鬼の面は『武悪』と呼ばれるが、本曲で武悪を着けて幽霊に扮したことによるものか」というように疑問を呈しているのだ。なぜ注を附した筆者が疑問のままにしたかということ、実際に狂言を演じる場合にはまったく武悪面を使わないからだ。またブアクが幽霊に扮する際に武悪面を着けると、ブアクを見たという主人の言葉と矛盾が生じるので、たとえ幽霊であろうとも武悪面を着けることはできない。だから狂言の中で面を着けるから武悪というのは受け入れがたい説となる。

ところで、京都大学名誉教授の佐竹昭広氏の名著『下剋上の文学』（筑摩書房・一九六七年刊）にこのブアクについての論文「勝利の歌」が収録されている。佐竹氏はこの論文で鍛工を意味する「ばんこ」という呼び名が訛つたものであるうとして、そして『曾我物語』の次の箇所を引用している。「大国よりぶあくたゆうといふばくやをめし三ヶ月につくらせ、一ヶ月にみが

かせ二尺八寸にうちいだす」である。この「ぶあく大夫」が刀鍛冶だから、狂言のブアクも刀鍛冶に係るというのである。その根拠として、狂言の中で太刀が何度も強調するように使われていることを指摘し、

太刀と何らかの関連性があるというのだ。佐竹昭広氏らしい奇抜な発想ではあるが、かなり強引な論の展開といえよう。残念ながら狂言「武悪」には刀鍛冶を連想させる必要性がない。また「ぶあく」を「ばんこ」

の転訛とするにはあまりにかけ離れすぎていて、音声上の無理がある。佐竹氏が「狂言の『武悪』が、登場人物の農民的性格のなかに、あわせて鍛工的性格をのぞかせているとしても、それはあえてあやしむにあらないことである。」と少し控えめに結んでいることから、これが無理な仮説であることがわかる。

一方、江戸期の評論書に『狂言不審紙』がある。文成六年、大蔵虎光が書いたもので『日本庶民文化史料集成』に翻刻、収録されているので手軽に見ることができ。そこには狂言「武悪」について次のように記されていた。「此狂言詞之通、別二不審なし。昔はふはくと書きしがいつの頃より武悪と書しや。不醜とはくならざる社面白からん。古書二云、一体狂言八目出度物ゆへ泪を流す業をも内心笑を含よふにすべしとの教育。譬ば幽霊と言共不醜と言処二心

得有へし。道成寺の能を祝言之能と言にて心得へし。愁傷の中二興有へし。此興と言二心得違多し。能々字知るへし。（後略）」

翻刻された活字を忠実に写し取った。ここから読み取れることは、昔は「武悪」というような漢字表記ではなく、「ふはく」と平仮名表記であったということである。しかし、その後が続く「不醜とはくならざるは面白からん」が全く理解不能だったため、私はその後の文章の理解をあきらめ、「ふはく」にだけこだわってしまった。まず「ふはく」は「ばんこ」とは違って音声的に「ブアク」に変わりやすい。つまり旧仮名遣いでは濁点を表記しないため、「ふはく」と表記されていても「ブハク」と読めるのだ。「ブハク」は「ブワク」から「ブアク」と転訛しやすい。平仮名表記という表音文字であることは表意文字に直せば、さまざまな意味にとれる可能性が生まれるということだ。だから次に考えることは「ふはく」ならばどのような意味で用いたのか、ということだ。そこで思いついたのが「不惑」と軽佻浮薄の「浮薄」である。不惑は「四十にしてまどわず」ということで、ブアクの年齢を示しているのかもしれない。浮薄は風俗、人情、行動などが軽々しくてすっかりしていない人物を浮薄という。つまりブアクが手打ちにされるほどに主人に憎まれるのは、何か軽薄なことをし

でかしたのかもしれない。また常々軽薄な行為をしている人物だから、浮薄と呼ばれていたのかもしれない。あれこれと空想しているうちに、つい口がすべって大和座の面々に語り、師匠にまで「『ブアク』は実は『浮薄』のことです。」と自慢げに言ってしまうから後悔した。「本当にそうだろうか」、何かが頭の隅に引っかかったままであることに気づいた。大蔵虎光は「ふはく」を漢字表記に直していたが「不醜」なのだ。これではどうしても「ふしゅう」か「ぶしゅう」としか読めない。しかもこのままでは「醜くない」という意味になる。大蔵虎光はこの漢字を二度用いている。しかも後に出てくる「譬ば幽霊と言共不醜」あたりはどうも狂言の内容について述べているようでもある。大学の図書館の地下書庫で『日本庶民文化史料集成』を何度もながめていて、かつて『狂言不審紙』の写本を見かけたことを思い出した。さっそく探してみると秩に入った二冊本の『狂言不審紙』があった。開いてみるとやはり「醜」ではなかった。白の下に鬼と書いてある。またあとに出てくる「譬ば幽霊と言共不醜」の字は白の横に鬼と書いてあった。つまり「醜」の字は魂魄の「魄」の読み違いだったのだ。これで合点がいった。「不魄とはくならざるは面白からん」つまり「不魄とたましいではないのが面白いではないか」

という意味だ。またその後の古書の引用部分も狂言「武悪」の内容であることが分かった。つまり、「古書に云うには、いつたい狂言というものは目出度いものだから、涙を流すような内容も内心笑いを含むようにするべきだ」という教えがある。たとえば幽霊といっても不魄（靈魂ではない）ということにおかしみがある。「という内容なのだ。「なるほど」と思わず手を打ったのだがいかがだろうか。そういえば、古典文学大系『狂言集』の「武悪」には「魂は冥途ありながら、魄はこの世にとどまって」というブアクの台詞がある。魂魄はともに「たましい」を表すが魂は人の精神を表し、魄は肉体を表す。魂は上昇して天に帰り、魄は埋葬され地に帰する。ブアクはまだ魄ではないので土に戻ることはなさそうだが……。

さて武悪面説・バンコ説・ふはく説いずれがもつともらしい説か、狂言を御覧になって、じっくりお考えいただきたい。

「参考文献」

日本古典文学大系『狂言集』

岩波書店（一九六十年刊）

新日本古典文学大系『狂言記』

岩波書店（一九九六年刊）

『日本庶民文化史料集成』第四巻

三一書房（一九七五年刊）



山田 師久（やまだ もろひさ）

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例輪読会の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

コラボレーションのおまけ

創造温泉での体験

森五六九(もりごろく)

関西の奥座敷「有馬温泉」。ここに「有馬玩具博物館」という世界中の玩具を集めたミュージアムがある。大規模で良質なコレクションの数々。温泉地にありがちな見せ物小屋の様相とは明らかに一線を引いている。創業八百年の歴史を持つ老舗旅館「御所坊」の御主人金井啓修氏の企画プロジェクトによるものだ。先月二十九日、私はこの博物館で高座を務めさせて頂いた。

金井氏とはもう二十年近くのおつき合いをさせて頂いている。氏はなかなかのアイデアマンで訪れる度に至極感心させられる。例えば有馬特有の茶色く濁った金泉と呼ばれるお湯を利用した浴槽の造り。入り口は当然男湯女湯と別れているが、スロープを通って中へ入ると双方の行き来は当然できないものの顔を見合ながら湯舟に浸かる事ができる。家族連れに人気が高い。環境問題、バリアフリー・・・どれをとっても並みのこだわり方ではない。それから有馬そぞろ歩き楽しさ。全国各地の温泉地を訪れることが多いが、結局ホテル内で全て用を済ましてしまい、全く街の散策をしな

かったという事が多々ある。街全体の魅力が薄いからだ。しかし有馬の場合、街のそぞろ歩きをする人がかなり多いのに気がつく。みやげ物屋や喫茶店、バー、ラーメン屋、博物館、どれをとってもある一定の統一感があつて落ち着きの中にわくわく感がある。これなども氏のプロジェクトによるところが大きい。私の家内などは行くと必ずチエックインよりかなり前に着いて、荷物だけをフロントに預けまず街の散策に出かける。少なくとも三時間近くは帰って来ない。何度も訪れているのによくまあ飽きないものかと思う。街全体が楽しいのだ。

また、氏はぜひいぶん前から有馬の「創造都市」化を提唱してきた。「創造都市」という言葉は世界的に都市計画に関わる人の間で流行しているらしい。その発端は都市計画の先進国イギリス。衰退した都市を芸術家などの創造的仕事に携わる人材の力で、まちの一般の人の創造性も引き出して、まちの諸問題を解決していく都市のこと。そんな流れの中、二年程前に完成したのが六階建ての施設「有馬玩具博物館」。ここには日本いや世界を代表する玩具作家たちの作品が集められている。子供のみならず大人が楽しい。いや大人の方がはしゃいでいるかも知れない。落語会の開演前、打ち合わせを兼ねてからくり作家で館長の西田明夫氏と話す機会が持てた。岡山にある現代

玩具博物館の館長も兼任されている。「蝶六さん、レゴっていう玩具があるでしょ。あれはデンマーク語で『よく遊べ』っていう意味なんですよ。自由な発想で自由に遊べばいい。でも日本ではレゴ・ブロックって言うって、ブロックを付ける。つまり『積む』という行為に限定しちゃう。『静かにおだやかに語るその眼差しは少年そのもの。いつべんに館長のこと大好きになった。館長も金井氏に惹かれてやってきた一人だ。ここでは子供たちが自由に発想し遊ぶコーナーがあつて結構賑わっている。『今日、皆さんにお見せするからくり人形はイギリスの作家が創りましてね、これは歌舞伎役者なんです。で、その人が河豚を食べている。・・・そうです。先代の板東三五郎さん。河豚の身を口に運ぶでしょ。すると十三回目にカクンと・・・』グロテスクでしかも毒性の高いものを好んで食べる日本人がイギリス人には奇異に映るらしい。人形を廻す度にベン、ベンと鳴る音も浄瑠璃の太棹を連想させる。また、頭をセンター分けにして見るからしくそ真面目な、スパゲティーを食べるイギリス紳士のからくり人形。イタリアにかぶれているらしくパンツはみどりと赤の水玉模様つまりイタリアンカラー。しかしどういいう訳か上半身は裸である。これはどういいう意味かと言うと、向こうでは正式な場ではシャツを汚す恐れ

のあるスパゲティーは出さない。だからシャツを汚さぬようにという配慮。滑稽である。このようにからくり作品ひとつひとつに色んな背景があつて聞けば聞くほど引き込まれる。館長との対談は多岐に渡つて、職人を大事にするドイツと日本の実情、人形による有馬芝居小屋構想・・・笑いと感心の中あつという間に時間が過ぎていった。

ところで今回の企画は「落語を聞いて鍋を食べる会」。会場入りしたお客をまず一番太鼓、二番太鼓で迎える。三十数名の方が集まつてくれた。演目は冬にちなんで私が「池田の猪買い」、落語家仲間の桂春雨さんに「河豚鍋」をお願いした。下座三味線は春雨夫人の中田まなみさん。落語の「河豚鍋」の前には、館長によるからくり人形の解説や河豚談義でお客を和ませた。それにしても反応のいい上質なお客さんだ。からくり人形のユーモアと落語のそれは相通ずるものがあるのだらう。「お客さんの中には何故に玩具博物館で落語会なのかと思われた方もおられると思います。でもここにある玩具はまさしく創造の世界、落語も想像の世界という事で・・・」という私の言葉にも大きく沸いてくれる。落語鑑賞の後、お客さんには館内にあるレストランや宿の部屋に流れてもらい、今度は食べる「河豚鍋」コースに楽しんで頂いた。我々演者一行も宿にてお客さまと同じもの

を食した。本当の食事とは腹だけでなく心まで満たしてくれるものだ、ここを訪れる度いつもそう思う。

会を終え、この原稿を書くため博物館が出しているホームページを覗いた。すると、館のスタッフのこんなコメントが載っていた。「二十年代半ばまでは『食べること』と『遊ぶこと』が子供の真剣な自己目的である時代が続いていた。(カトウくんのおまけ・玩具デザイナー加藤祐三の世界より)今現在でも子供たちの欲求の大半を占めるのは『食べること』と『遊ぶこと』です。これは子供たちのみならず、大人であつてもそういう童心を持ち続けているでしょう。今回企画した『落語と鍋の会』ではそんな大人たちに潜む子供の部分を刺激することができたと思います。落語という日本古来からのエンターテイメント、そして河豚鍋という冬の珍味。このコラボレーションはものすごい意外性があるんですが、良く考えてみるとグリコのおまけとキャラメルみたいなとても自然な組み合わせではないでしょうか。」

これを読んでふと思ひ出したのは「上質のコラボレーション」ということ。我が大和座のメニューで些か恐縮ではあるが、近いところでは去年の年末A&Hホールでも紹介した岩崎勇先生と我が師安東によるコラボレーション。日本を代表するオーボエ

奏者岩崎先生の演奏に合わせて安東が小舞を舞つというもの。また、井上放雲のチェロ演奏と安東の小舞もあつた。どれも上質のコラボレーションだ。それぞれがそれぞれの芸をその素材のまま紹介し、それぞれが変な奇をてらうことなくコラボレーションするというのが良質の演しものにつながる。中途半端な歩み寄りには要らない。多少の作戦は必要だろうが上質で良質同志がそのままからみ合えばきつといいものができるといういい例。私自身は上質というにまだまだ程遠いが・・・

さて、今回の「落語と鍋とからくり人形」もどうやら次回につなげることができそう。次回は四月二十三日を予定している。やはり同様の趣向。どうやら口コミという最高の媒体が味方してくれたらしい。「落語を聞いた」というだけではなかなか井戸端会議に上らぬが、「落語と鍋とからくり人形の会に行つた」と言つとちよつとした興味湧いて口から口へと情報が伝わっていく。このコラボレーションにはちよつとした大きなおまけ「口コミ」までもが付いてきた。おまけは幾つになつたって嬉しいものです。(了) 二〇〇六・二・二一



森五六九（もり じろく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECCA（チストカレッジ）の落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

兆紀探求

「限界への挑戦」

小田兆紀

「自分で自分の限界を決めてしまわないで、その殻をぶち破ろうとする思考形態を持つて欲しい」いきなりですが、この台詞は私が関わっている狂言教室全ての方達に言っている台詞です。誰でも苦手意識というものを持っていると思います。狂言に関して言えば、例えば謡いが苦手、舞が苦手、所作が苦手、長台詞が苦手など、苦手分野は人それぞれ、人の数だけ存在します。生意気な事を申ししておりますが、当然私にも得手不得手があります。私は、そういう方には自分自身に対して言い聞かせる様に上述べた様な事を申し上げます。出来ない！と決めつけるのは早くて楽ですが、続ける以上それを克服すれば結果更に表現の幅を広げる事が出来、今後の自分の発展に繋がるだろう。それは狂言だけに留まらず生きていく上でも生活に張りを持たせる事が出来るではないか、と提唱しています。苦手なものを克服するという事は並大抵の努力ではならないでしょうがその努力が無駄に終

わる事は無い、それが適った時の達成感ばかりと自分に自信をもたらしてくるに違いないだろうと言つのです。

子供会にて、少し気が入っていない、または明らかに努力不足の子供にはこういう事を私は言っています。「遊ぶだけ、楽しさだけを求めてここに来て居るのなら友達と遊んでゲームなりお喋りをして居る方が絶対楽しい、わざわざここに出てきて僕を前にして狂言をしてもらう必要は全く無い。君達はここにきて、自分では分かっているかもしれないが、君達が普段考えている楽しさとはまた違った楽しさが古典にあると感じているからこそここに居るのだろう。だからやる以上は力いっぱい、一所懸命やりなさい」と。子供達は大人程言い訳をしません。何が出来ないこれが駄目、というのは大体大人です。言い訳の芽を摘む、と言うと誤解があるかもしれないが小学生の口から自分にはこれが出来てこれが出来ない、などと言う事は聞きたくありませんし、そう言うのはそれこそ10年早過ぎます。無限の可能性を秘めた子供達に対してだからこそそういう思考に陥らないように導いてあげたい、自分を信じて努力すれば成果が出るという事を教えてあげたい。その為どうしても必要以上に力説してしまします。こう言つと、子供は子供なりに発奮して奮起するのか次の週には良



小田 兆紀（おだ ちよつき）
一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

スタンダード

金久蒼汲

携帯電話の契約者数は九千万人を超え、普及率は今や人口の約八割を占めるそうです。これは恐らく成人した人のほとんどが所有していると言えると思います。普及し始めた頃にはまだ音声通話だけだったサービスも、電子メールや情報通信へと拡大し、さらに端末には写真が撮れるものや音楽が聴けるもの、テレビやラジオを受信できるもの、目的地への道案内をしてくれるもの等が次々に登場し、今ではレジで端末をかざすだけで料金の支払いができてしまう「おさいふケータイ」というものまで現れました。たかが携帯電話と軽く考えていたのに、たった数年の間に目まぐるしい進化を見せる日本の技術力には改めて驚かされてしまいます。しかしこれらのサービスや機能が全て必要かと問えば、必ずしもそうではないでしょう。どれもこれも利便性を売りにしているが、それらが無いからといって大して困る事もなく、かえって邪魔になり、ただのお節介に感じてしまう事だってあります。寧ろそれらの中には扱い方を間違つと周囲の迷惑になり、また大袈裟かも知れませんが、自分の身を危険にさらすことにもなり兼ねません。中でも「おさいふ

ケータイ」について私は不信感すら抱いてしまいます。このサービスは、あらかじめICチップにお金を入金しておいて、支払の際レジの機械にデータを読み込ませることで料金の支払いをする、今話題の「電子マネー」という機能を携帯電話の端末に持たせたものだそうです。これならお財布を持ち歩く必要もないし、ポケットが小銭でジャラジャラなんてことにもならず、スマートフォンに買い物ができます。また対応する企業や飲食店、コンビニ等も続々と増え、利用者は今や一千万人を越えるそうです。「電子マネー」自体は大変便利で、私も電車に乗る際にプリペイドカード式のものを利用するのですが、なにもその機能と携帯電話をくっつけてしまう必要はないと思うのです。ただの屁理屈になりますが、お財布と携帯電話がひとつになっているということは、もしも携帯電話を無くしてしまうたらお財布まで一緒に無くしてしまうという事になってしまうと思います。当然無くした際には遠隔操作で端末にロックを掛ける機能や不正利用に対する補償もあるので、迅速に対応すれば過度に心配することもないでしょう。しかし前述したように今や携帯電話には様々な付加機能が付けられ、それに付随する個人情報もたくさん詰まっています。それらを無くしてしまうだけでも危険なことであるのに、いくら安全策がしつ

かりしているからと言っても、その上さらにお財布まで無くなってしまふこと自体が非常に危険でシヨックも大きいのではないでしようか。人間の欲望は止まる事を知らず、便利なものにはさらに便利さを求め、利益増幅を目論む社会はそれに乗じて次々に目新しい価値を作り上げます。ひとつの機能に特化したスタンダードなものは眉をひそめ、既存のものに無理やりにも異なる機能を持たせ新たな価値を捏造する社会は、サービス過剰、お節介極まりないと言わざるを得ないでしよう。そしてその捏造されたお節介な便利さには、扱ひ方を間違えれば済し崩しのに痛手を被る危険性が隠れていることを、私達は認識しなければなりません。便利なものほど慎重にその価値を見極める目を養うべきであると思ひます。

さてこうした動向は日常生活に止まらず、映画や舞台芸術の世界にまで蔓延しているように見えます。周りを見渡せば、莫大な製作費を掛けた豪華絢爛な衣装やセット、理不尽な物語に不釣合な配役、その上お節介な宣伝文句で観客の判断基準を狂わせるものばかり。それら総てを拒んでゐるわけではないのですが、明らかに過剰なもの観る気さえ失つてしまいます。確かに古臭い手法や演出よりも、斬新で新しいものの方が注目されるといふのが世の風潮でしょう。ですがその古臭いものの中に、新しい

ものを凌駕し続ける力がある限り、私は風化の加速側にまわる事を潔しとはしたくありません。いくら世間や時代のニーズだからと言って、作者の意図や物語の本質を捻じ曲げ、蔽ひ被せてしまふような自体は絶対に避けるべきです。勿論どの世界にも時代に合わない旧態が存在し、不具合が生じるようであれば当然そこから脱するべきでしょう。変化を拒むことも恐れることも必要ないが、煩雑とした情報や見掛け倒しの装飾に惑わされてはいけません。そのためにはやはり物事の本質を見極めることが大前提であると思ひます。

大和座はそんな複雑な世の中にあつて、いかにして現代社会と向き合い、また室町と向き合つべきかをこれからも模索し続けねばなりません。いつの時代も世間はスターの登場を待っています。ですが幸か不幸か、いわゆる世間のスターにはなり得ないであろう私達は、ごく自然に狂言を活かす、常に洗練されたスタンダードな存在でありたいと思ひます。



金久蒼汲（かねひさ そうきゅう）
一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。四年インドネシア公演旅行に参加。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

三月

十四日【火】午後六時 千里山教室

輪読会「海道下りについて」

(参加費)五 円

「お問合わせ」大和座狂言事務所

二十三日【木】午後一時 天保山埠頭上

艦隊基艦「かしま」

海上自衛隊練習艦隊「文化講演会」 非公開

四月

十一日【火】午後六時 千里山教室

輪読会「班女を読む」

(参加費)五 円

「お問合わせ」大和座狂言事務所

十八日【火】 ニューミュンヘン南

「アキナイクラブ例会/講演」 非公開

二十一日【金】午後六時三十分

「古典伝統芸能と出会つひととき」その四十

新シリーズ《室町の民衆像》

『室町の自由人/出家』

「魚説経」「骨皮」講話と歌唱ほか

会場 千里中央「A&Hホール」

(入場料)会員/二二〇〇円

一般/一五〇〇円

「お問合わせ」A&Hホール

〇六 六八七三 二六〇一

編集後記

先日、大和座年中行事の最後の締めくくりである『艸言会』が無事に終わりました。狂言十二番に小舞が十二番演じられました。今年で22年目を迎えるこの会は大和座と共に狂言を愛して下さっている方々によって支えられています。またA&Hのシリーズ公演も今回で39回目、もう7年近く続いております。昨年末の公演では、100名以上のお客様が足を運んでくださり、大和座一同、大変感動致しました。

大和座は長年にわたり古典の持つ力について真剣に考え、そしてそれを素直に真っ直ぐ表現する事に努めて参りました。それに賛同して下さる方々の支えがあり、その思いがしっかりと形になってきています。教育の現場に向く事になった小田、金久は、演技のみならず精神面においてもかなりの成長を遂げております。それを暖かく見守って下さる先生方や兄弟子、そしてそれに続く若手たち。大和座によい風が吹

ていると何度か書きましたが、催しを一つ一つ終える度に、その念は更に強くなつてまいります。

2006年度がスタート致しました。今年一年、また大きく成長した姿を皆様にお見せできるよう、今年も奮進して参ります。どうぞ、ご期待下さい。

秀

発行日 二〇〇六年二月二十二日

編者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)501

FAX 06(6384)087

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp